

日本フランス語フランス文学会

# cahier

30

septembre 2022



I 2022年度春季大会の記録

ワークショップ

- 1 日本の学生が選ぶゴンクール賞——総括と展望  
久保昭博 今井勉 小川美登里  
加藤靖恵 倉方健作 2
- 2 北米大陸におけるフランス語文学——ケベック文学の現在  
小倉和子 佐々木菜緒 河野美奈子 6

II 書評

- 山口孝行（著）『ピエール・ルヴェルディとあわいの詩学』、水声社、2021年  
長谷川晶子 10
- ジュール・ミシュレ（著）『民衆と情熱——大歴史家が遺した日記 1830-74』（全二分冊）、大野一道・翠川博之訳、藤原書店、2020年  
真野倫平 12

# I 2022 年度春季大会の記録

特別講演

---

*Pour une bibliothèque mondiale*

William MARX (Collège de France)

司会 澤田 直 (立教大学)

in *LITTERA* n° 8

### 日本の学生が選ぶゴンクール賞——総括と展望

コーディネーター・パネリスト：久保昭博（関西学院大学）

パネリスト：今井勉（東北大学）、小川美登里（筑波大学）、加藤靖恵（名古屋大学）、倉方健作（九州大学）

本ワークショップは、2021年秋に始動した「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の約半年間にわたる活動を振り返るものである。まず久保が活動の全体を概括した後、各地区の代表者が発言し、会場からの質問等を受け付けた。

この企画は、当時26の国が参加していた「国際ゴンクール賞」の日本版創設をフランスのゴンクール・アカデミーより打診された澤田直（立教大学）の呼びかけによって始まった。2021年8月から9月にかけて運営組織の整備と「選考委員」となる学生の募集を進めた結果、当初の予想を大きく超える126名の学生（高校生から博士課程後期の大学院生にいたる）と14名のサポーターが集うこととなった。10月24日に開催された全体ガイダンスでは、フランスのゴンクール賞にノミネートされた9作品につき、予めレジュメ作成を担当した教員がそれぞれの作品のプレゼンテーションを行い、選考委員たちはそれを踏まえて、後日オンラインで各自が読みたい作品を選んで投票した。この第一回投票を経て絞り込まれた4作を、北海道・東北地区、関東地区（3グループ）、中部地区、関西地区（2グループ）、中国・四国・九州地区の5地区（8グループ）に分かれた選考委員が、週に一回程度の読書会を開いて読み進めたうえでそれぞれの候補作を決定し、2022年3月29日に東京のアンスティチュ・フランセで開催された最終選考会に地区（グループ）代表が一堂に会して受賞作を決定した。

受賞作となったのは、クララ・デュポン＝モノ『受け入れたならば』（Clara Dupont-Monod, *S'adapter*, Stock）である。この結果は、テーマの普遍性、芸術的な完成度、翻訳されて日本の読者に届けられるべき作品か等々、選考委員たちが自らの感性と知性を拠り所に評価の基準を考え、議論を重ねた末に出されたものだ。大げさかもしれないが、このようなプロセスを経て新たな文学的価値が創出されたことを喜びたい。

\*

今回の「日本の学生が選ぶゴンクール賞」において中心的な役割を果たしたの

は、各地区で行われた読書会ならびに選考活動である。地区ごとに選考委員の人数や構成が異なるなか、各地区の教員と学生が協力し、それぞれ特色のある活動が展開された。以下、各地区代表者からの報告を転載する。

◎北海道・東北地区を担当した今井勉（東北大学）——北海道・東北地区は学生選考委員 15 名（北海道大学 2 名、東北大学 13 名）と運営委員 3 名（今井、深井陽介先生、クロエ・ベレック先生〔所属はいずれも東北大学〕）の体制でオンライン読書会を行った。結果として学生委員全員がディプロムを取得した。深井先生の授業時間を用いた火曜会と休日夕方の日曜会で別々の作品を扱い、前者は *Le Voyant d'Étampes* と *La plus secrète mémoire des hommes* を、後者は *S'adapter* と *Enfant de salaud* を読んだ。週 2 回参加のコアメンバーが週 1 回参加の委員のために会の冒頭、他方の会の報告を行った。シノプシスで概略をつかんだうえで「原文に親しむこと」を主眼とし、毎回範囲を決め、2 人ひと組で発表、全員が感想を述べ、教員が語学的な質問に答え、時折解説も行った。教員が関与しない金曜会が企画され、自由な意見交換の場として機能した模様。コアメンバーはこのプロジェクトに週 3 回従事しており、「ゴンクール・サークル」の誕生を思わせた。読書会は共同学習の場として有効に機能したと言える。「本当に参加してよかった」（学生委員）、期限のあるなか「ほどよい緊張感を味わいながら全員で向き合い議論することで本当に楽しいグループワークができた」（運営委員）と高評価を得た一方、「広く周知し、参加を呼び掛けるアピールはするべきだ」との意見もいただいた。意義深いこのプロジェクトを今後も継続するためには、効果的な周知に加え、運営委員の数を増やすなど、負担を分散する工夫も必要であろう。

◎関東地区を担当した小川美登里（筑波大学）——関東地区では委員を募った段階で 50 名近くの登録者があったため、希望の曜日等についてアンケート調査を行い、3 グループが作られた。そして 2021 年 10 月から 2022 年 3 月末までのおよそ 5 ヶ月間にわたり、月曜グループは毎週月曜 21 時、土曜グループは隔週土曜 20 時、日曜グループは毎週 17 時から、年末年始を除いて Zoom で読書会を行った。読書会の議事録やその他のやりとりは各グループ専用のコミュニケーションツール（Slack）を用いた。最終的に委員に認定されたのは月曜グループ 6 名（学部生 4 名、大学院生 1 名、サポーター 1 名）、土曜グループ 9 名（高校生 1 名、学部生 6 名、大学院生 2 名）、日曜グループ 7 名（学部生 3 名、大学院生 2 名、サポーター 2 名）で、内訳が示すとおり、フランス語を学習中の高校生から、学部や大学院でフランス文学を学ぶ学生（日本文学専攻生もいた）、さらには留学経験者や学位取得者にいたるまで、「日本の学生」という括りの中での多様性が本地区の特徴であったように思われる。学年や所属の異なる人たちがそれぞれの日常を離れて Zoom 上で集い、同じ本を読み、意見を交わし合うという経験は、上下関係やシラバスに縛られた大学の授業とも、独り愉しむ読書とも違

う交流のあり方を示唆したのではないか。辞書とシノプシスを頼りに海外の最新小説を読むという制約の中で学生たちが編み出したさまざまな創意工夫の中に、新しい読書の可能性が秘められているように感じられた。こうした学生の活動を近くから見守ってくださった関東地区責任者の國枝孝弘先生をはじめ、畠山達先生、佐々木匠先生、陣野俊史先生、鈴木雅生先生にも感謝を伝えたい。

◎中部地区を担当した加藤靖恵(名古屋大学)——関東と関西に挟まれた中部地区は、選考委員の集まりが最も危惧された。「ひとつのお祭り、祝祭の空間を目指したい」という澤田先生のメールに励まされ、「祭り」をキーワードに勧誘を開始、2年生から博士課程まで17名(名古屋大学、名古屋外国語大学、金沢大学)がエントリー、卒論修論・試験の時期を経たものの、10名が完走した。運営委員の木内堯先生と岩津航先生には、紹介を担当された作品の読書会に立ち会っていただいた。日程調整が困難な中、Teamsによる月平均2回の読書会を選考委員が企画した。毎回2~4名が、2、3箇所の日文抜粋、和訳、コメントを記載した資料を作成、討論の土台とした。2年生対象の勉強会は授業のない時間帯を利用し、読書会の進行に合わせて毎回4~5ページの逐語訳を学生が行い、教員より文法や語彙を説明した。授業では馴染みの少ない現代の、しかも作風も異なる4作品に触れるのは新鮮だったようだ。これまで学ぶ機会のなかった口語表現や俗語、時事問題の知識が必要なものの、登場人物の語りや会話の比重が大きく、ストーリー性にも優れ、「古典的」作品より読みやすいという反応が目立ち、フランス語読解の自信がついたようだ。自らの問題との共通点を見つけた、小説の読み方が変わった、研究への示唆を得られたという感想が見られた。授業では今だに「ゴンクールで読んだ作品のよう」という発言があり、共通の読書体験が教室内で形成されたことを実感する。学生側の強い要望で、後期の学部文学演習は*S'adapter*に決定した。

◎関西地区を担当した久保昭博(関西学院大学)——関西地区では発足時に36名の選考委員を数えた。そのため参加しやすい曜日に従って「平日グループ」と「休日グループ」の2グループに分割し、それぞれ独自に選考活動を進めることとした。「平日G」の責任者は篠原学先生、「休日G」担当は久保である。また平光文乃先生にも協力いただいた。だが両グループとも実質的にメンバーを取りまとめ、活動を牽引したのは、それぞれに4名ずつ配置した大学院生のグループリーダーであった。彼らを中心として両グループがゆるく繋がりつつ、ほぼ同ペースで候補作を読み進めるのが関西地区の特徴であった。原則週1度、主に夜間に2時間という会合形式は、オンラインでなければ不可能であっただろう。ただしこの密度を負担に感じた選考委員もおり、ディプロム取得までたどりついたのは19名であった。無理のない運営方法の模索は今後の課題だが、とはいえ「振り返りの回」などを企画し、多くの人が継続しやすい環境を作る工夫を選考委員自らが提案してくれたことや、エリック・アヴォカ先生が*Enfant de salaud*につ

いてのレクチャーを開催して作品理解を助けてくれたことは特筆すべきである。関西地区では *S'adapter* と *Enfant de salaud* (平日 G)、*Enfant de salaud* (休日 G) を候補作として選んだ。評価方法も会読や議論の方法もすべてが手探りという緊張感の中で、それぞれの感性や知識を突き合わせながら、シノプシス中心とはいえ読むことを共有できた経験は、選考委員のみならず、文学教育に携わる教員としても意義深いものとなった。

◎中国・四国・九州地区を担当した倉方健作(九州大学)——中国・四国・九州地区は 9 名の選考委員でオンラインによる活動を開始した。選考委員は全員が学部学生で、お互いに事前の面識はほとんどなかった。このような状況から、まずは打ち解けた環境づくりを重視するとともに、いわゆる「講読」を行わないことを選択した。広島大学の宮川朗子先生、マリ＝ノエル・ボーヴィウ先生、福岡大学の村石麻子先生にファシリテーターとして参加していただくことで、教員 1 名と複数の学生という通常の授業に似た形式も幸いに避けられた。毎週のミーティングでは、冒頭で各選考委員から読書の進捗や現時点での感想を聞き、その後ブレイクアウトルームで選考委員のみで話し合ってもらった。最後に呼び戻して、話し合いの概要を何人かに報告してもらい、質問を受けた。時間は平均 1 時間強であった。なお、ミーティングの時間の固定や教員を含まないブレイクアウトルームでの話し合いは選考委員からの自発的な提案による。こうした意思決定には、選考委員が LINE グループで連絡を取り合ったことなども反映しているだろう。大部分の選考委員はレジュメやシノプシスに多くを負ったが、作品全体を原文で読むことが必須であるとは思わない。むしろこちらの想定とは違った、あるいはこちらにはできないやり方で作品が「読めている」ということこそ「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の意義ではないか。選考委員による個々の作品の感想を聞いてその思いを強くした。

\*

ワークショップを閉じるにあたり、「日本の学生が選ぶゴンクール賞」全体の主導者であった澤田直より、この「無謀な」企画を、フランス文学研究や教育の活性化はもちろん、世代間の交流から次世代の文化創造につながるものとして構想したいという発言があった。今後もこの活動を継続するにあたり、たしかに課題は少なくない。だがその理念は、筆者を含めた本ワークショップ関係者によっても共有されている。

(久保昭博)

### 北米大陸におけるフランス語文学——ケベック文学の現在

コーディネーター・パネリスト：小倉和子（立教大学）

パネリスト：佐々木菜緒（白百合女子大学），河野美奈子（立教大学）

カナダ・ケベック州は、圧倒的な英語圏である北米大陸にありながらフランス語を公用語とし、日常言語として維持している稀有な地域である。しかし、歴史的に見ると、そのような社会を実現するために乗り越えなければならなかった困難は決して少なくなかった。1960年代に「フランス系カナダ人」から「ケベックワ」というナショナル・アイデンティティに目覚め、「静かな革命」と呼ばれる近代化を短期間で成し遂げた人々は、現在では多くの移民を受け入れながら独自の間文化社会を築いており、そこでは文学も大きな役割を果たしている。本ワークショップでは、初めにコーディネーターの小倉がケベックの歴史を概観したあと、日本ケベック学会（2008年設立）の会員でもある3名が、以下の順に20世紀後半以降のケベックの文学的状况を紹介した。

#### 1. 1950～70年代、「静かな革命」前後のケベック文学

佐々木菜緒

この時期の文学作品には、伝統的な価値観および集団意識への「抵抗」が主要な主題としてあらわれている。それらの「抵抗」は、歴史的空間と地理的空間のあいだのずれを認識し、それを受容しようとする態度に起因する。すなわち、「フランス系」という観念的な空間から、自分たちが実態として根をはっている北米大陸へと目を向け、「アメリカ性 *américanité*」において新たな自己を引き受けていこうとする意志と深く関わっている。

具体的にみると、イヴ・テリオールの小説『アガグック』（1958年）は、伝統的集団意識に対する近代的個人主義を描いた作品として「静かな革命」の時期を代表する文学作品とされる。同作品にあらわれる北米大陸は「所有されるもの」としての新世界、および世界の果てとしてのアメリカ的なフロンティアの表象と結びついている。他方、イヌイットが生きる広大な空間および厳しい自然環境を通して、人間の生の原始性と呼ぶもの、いわばヨーロッパ的な価値体系では捉えられない部分が描き出されている。

また、ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ガラルノー』（1967年）は、「ケベック人とは何か」という当時のアイデンティティ言説への応答として読むことのできる作品である。そのアイデンティティは、「フランス系」に付与されていた崇高さや偉大さといった精神的美学ではなく、卑小な日常や俗っぽい大衆文化と結びついたものであり、アメリカ合衆国の社会文化圏に属する「北米人」であることを自明の理として受け入れるものである。

そして、「個」の視点から歴史の再構築を試みるナラティブを代表するアンヌ・エペールの小説『カムラスカ』（1970年）では、物語の中心となっている「カムラスカ Kamouraska」と呼ばれる先住民の土地の風景の所有のあり方が書かれている。その土地は、北米のフランス文明の規範外に位置づけられた異質空間として描かれており、この空間の所有を企てる主人公を通じて、ことばでは捉えられないものとしての風景を自己の存在の一部として認識する有り様が書かれている。

以上のように古典作家を「北米大陸」という視座で読み直すことによって、北米大陸という環境に根をはった生物としての人間像、および実態とつながった文脈での実践を通じて形成される主体性のあり方を引き出すことができる。北や冬のテーマと結びついた空間の中で人間の生は原始化され、広大で「果て」を思わせるケベックの自然の風景を前にしてさまざまなヨーロッパ的な価値観や思考、言語は解体されていく。そのような存在様態をケベックの文学作品から読解することができる。

## 2. 1980年代以降の「移住（者）のエクリチュール」

小倉和子

カナダ連邦政府のピエール・トルドー政権が1971年に多文化主義政策を打ち出すと、ケベック州にも多様な出自の移住者が到着し、そのなかには1980年代以降、文学の領域で新しい地平を切り拓くようになる者も出てくる。難民、亡命者、より大きな表現の自由やより多くの読者を期待してやってきた者など、ケベックを選んだ（そして、ケベックに選ばれた）理由はさまざまだが、彼ら／彼女らが書いたものはしばしば「*écriture migrante*（移住（者）のエクリチュール）」と呼ばれて注目されるようになる。

たとえば、南ヴェトナム生まれで、10歳のときにポートピープルとしてケベック州に到着したキム・チュイは、自己の半生を1人称の断章形式で綴った『小川』（2009年）でカナダ総督文学賞に輝いた。また、ハイチの独裁政権下でジャーナリストだったダニー・ラフェリエールは23歳のとき命の危険を感じてモンレアルに移住し、9年後に作家としてデビューする。その彼が後に発表した『甘

『漂流』(1994年、2012年)は、到着直後の根無し草的な(しかし甘美でもある)心境を想起して綴った1人称小説である。さらに、日本出身のアキ・シマザキは26歳のときに自らの意志でカナダに渡り、大人になってから覚えたフランス語で詩的情緒豊かな小説群を発表している。彼女は原爆、不倫、肉親殺しなど重い主題を取り上げることが多く、静けさを帯びた文体とのギャップが特徴的である。

こうした「移住(者)のエクリチュール」の共通項として、おおよそ次のような点を指摘することができるだろう。まず、「自伝的フィクション」が多く、脚色されている部分もあるとはいえ、移住者たち自身の体験をもとにフランス語で書かれているという点。次に、社会学的なデータ(数字)からは読み取りにくい一個人の体験や心境が個人的かつ普遍的なかたちで綴られているという点。さらに、作家自身にとって、書くことが「癒し」、「自己肯定」、「社会参加」につながり、他の移民たちにとっては作家たちが代弁者になり、ロールモデルになるという点。読者はそれらの作品を読むことで他者理解を深め、ケベック社会の多様性を知る。それによって「間文化社会」の成熟が促されている。また、生粋のケベック作家たちも、移住作家たちから刺激を受け、主題を多様化させている。最後に、政府にとっても、移民も含めたフランス語話者の増加は、北米におけるフランス語社会の持続可能性を保証するうえできわめて重要であるため、大学の文芸創作コース、大学院での文学研究、各種文学賞なども連携しながら出版助成に力を入れている。

### 3. イヌー文学における過去と現在

河野美奈子

カナダの先住民作家たちは近年大いに注目を集めており、多くの作品が出版されている。特に昨年5月、ブリティッシュコロンビア州のカムループスで先住民の児童のための寄宿学校跡地から多くの遺骨が見つかったことは、衝撃をもって受け止められ、カナダ全土で先住民の文化について改めて注目を集めることとなった。

ケベックのアメランディアンの中なかでもっとも人口の多いイヌー族出身の作家の多くが女性だということは、特筆すべきことである。詩人ジョゼフィーヌ・バコンは1947年に生まれ、5歳のときに寄宿学校に入った。彼女はそこでフランス語を学び、イヌー語とフランス語の二言語表記で詩を書いている。彼女の入った寄宿学校は先住民の言葉を使用することに関しては比較的寛容だったこともあり、バコンはイヌー語を忘れなかった。それでも先住民としてのアイデンティティを否定され、家族との生活を通して受け継がれるべきイヌーの文化の伝承

が絶たれたことに変わりはない。『メッセージ棒』(2009年)において彼女は寄宿学校の記憶、そしてイヌーの記憶を詩に書くことによって、絶たれた祖先との記憶をふたたび辿ろうと試みている。

バコンは詩を書くことで寄宿学校のトラウマと対峙したが、多くの寄宿学校から生き延びた人々はそれを癒やすことができなかった。トラウマは自身の子、孫の世代へと継承されていくことになる。

バコンと40歳離れた作家ナオミ・フォンテーヌもまた祖先のトラウマを引き継ぎ、寄宿学校の記憶を小説のなかに描いている。だが、フォンテーヌが描くのは寄宿学校による傷や祖先との断絶だけではない。彼女が『クエシパン』(2011年)で描いたのは現在の居留地の問題である。一続きのストーリーではなく、断片形式で書かれた本小説では、居留地のなかで蔓延する家庭内暴力やドラッグの問題が間接的に読者に問題が想起されるような形で描かれている。また、若い世代に属するフォンテーヌは、バコンが辿ろうとした祖先への道を求めるべき対象だと認識しつつも、時の経過や世代間の隔たりを実感している。

世代間の隔たりはあるものの、2人の作家には共通したテーマがある。それは、祖先の土地を再発見することこそがイヌーの未来につながることを示している点である。

バコンとフォンテーヌにとってのフランス語は異なる性質を持つ。前者にとっては「押し付けられた」ものであるが、「書くこと」を獲得した言語でもある。そのため、外部の文化が入り込んだイヌーの世界を表現するために、イヌー語だけではなく、フランス語との二言語表記によって書くことで、複雑なイヌーの世界を描こうとしていると考えられる。後者にとって、母語であるフランス語で書くことは必然的である。だが、そうした必然性を超えて、イヌーの世界だけに留まらない、より開かれた世界へ向けて自身の言葉を発信する手立てが彼女にとってのフランス語であると考えられるだろう。

\*\*\*\*\*

各パネリストからの報告後、フロアとのあいだで活発な質疑応答が行われた。参加してくださった方々に深謝するとともに、本学会の活動が今後もより広くフランス語圏世界に目を向けていくことを願いたい。

(小倉和子)

## II 書評

山口孝行（著）『ピエール・ルヴェルディとあわいの詩学』、水声社、2021年

評者：長谷川晶子（京都産業大学）

本書は2015年に山口孝行氏が筑波大学に提出した博士論文を大幅に加筆修正したものである。ピエール・ルヴェルディ（1889—1960）の詩論と詩作品、手記や手紙を時代順に分析することにより、詩世界の変遷を筆者自ら命名した「あわいの詩学」からとらえるという独創的な研究である。「あわい」という和語が有する多義性を十分に意識しながら、イメージとイメージの「あいだ」に生じるポエジーを分析し、イメージの重なり合った「淡い」状態へ至る運動性を「あう」という動詞に依拠してとらえようと試みている。

21歳でパリに出たルヴェルディは、アポリネール、マックス・ジャコブ、ピカソらと交流しながら、自らの詩学の基礎をつくりあげた。「イマージュはふたつの現実の接近から生まれる精神の純粋な創造物である」からはじまる彼の有名な詩論「イマージュ」（1918年）は、ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』（1924年）でとりあげられたため、シュルレアリスムの先駆者とみなされることもある。やがてルヴェルディは前衛芸術のグループから距離をとり、1926年に心の平安を求めてフランス西部のソレームに隠遁した後も詩を書き続けた。本書はルヴェルディの詩活動の総体を年代順に追いかけて、前衛の詩人という従来の理解にとどまらない、孤高な詩的探求を続けたルヴェルディ像を提示している。

本書は四部構成をとり、10年代、20年代、40年代と創作の盛んな三つの時期ごとの特色を詩の詳細な分析を通じて浮かびあがらせ、ルヴェルディが同時代や後世の創作に与えた影響を検証して結ばれている。

第I部「イマージュ」では、1918年の詩集『屋根のスレート』掲載の詩作品と、雑誌『ノール・シュッド』掲載の詩論を照らし合わせながら、この時期に特有の詩学を紐解いていく。断片的な詩語を配置するという「サンタクス」の方法を編み出すことで、比喩や隠喩などの修辭的な手法からイマージュを解放しようとするルヴェルディの活動を浮き彫りにしている。

第II部「変貌」では、1929年の『風の泉』と『ガラスの水たまり』の詩作品を中心に、1920年代のルヴェルディの詩学におけるイマージュ同士の衝突による「あわいの詩学」の運動性が論じられる。さまざまな挫折や苦しみを味わった詩人は、より堅固な「詩的な現実」を追い求め、過剰な要素と不足の要素という

対立するイマージュを暴力的に突き合わせて、その間にポエジーを浮かびあがらせようとした。

第 III 部「闖入」では、1948年の手記『私の航海日記』と詩集『死者たちの歌』を中心に詩を分析し、40年代の詩作の解明に挑んでいる。筆者は詩篇「彼は頭を金でいっぱいにして……」を例にとり、希望と絶望という対立するイマージュが並列し、対立が融解し、そのいずれとも決定できないような「淡い」イマージュの生成を見届けている。

本書を締めくくる第 IV 部「あわいの詩学」では、シュルレアリストたちや戦後の詩人たちとの関係を検証することで、ルヴェルディの詩的実践をフランス詩の歴史に位置づけようと試みている。

以上からわかる通り、本書の特色はふたつある。第一に、ルヴェルディの詩学の展開と人生の展開を有機的に絡めて論じたこと。第二に、「あわい」という和語を用いてその詩学の変遷を明らかにしたことである。第一の特色については、詩人が自分の人生を自ら語ることを好まなかったため、詩や詩論から必要な要素を読みとったり、逆にその時々的人生から詩を分析したりするなど、苦心の跡が窺われる。第二の特色については、ルヴェルディの詩学を和語の「あわい」というキーワードで論じることに疑問を抱く読者もいるかもしれない。また、原文をその都度引用しているとはいえ、分析が和訳に基づいているようにみえる箇所もあり、原文のもつニュアンスを十分に掬いあげているのかという懸念もある。おそらく、筆者は批判を承知のうえで、あえてこうした手法を選んだのであろう。それによってグラデーションに富んだルヴェルディの繊細で豊かな詩世界を丁寧に提示したことは、高い評価に値する。

日本では、1960年代から抄訳が出版されていたものの、ルヴェルディ研究はあまり多いたとはいえない。近年ではノート的重要性に着目した桑田光平氏や、詩と宗教観の関係を探った宇多瞳氏の研究などがあるとはいえ、数は限られていた。それゆえ、総合的なルヴェルディ研究が一冊にまとめられたことには大きな意義がある。なお山口氏は、平林通洋氏と共同でルヴェルディのアンソロジーの邦訳を手がけていることを付記しておこう（『魂の不滅なる白い砂漠 詩と詩論』幻戯書房、2021年）。本書と邦訳の相乗効果によってルヴェルディの愛読者が増え、研究がいつそう進展することを期待したい。

ジュール・ミシュレ（著）『民衆と情熱——大歴史家が遺した日記 1830-74』（全二分冊）、大野一道・翠川博之訳、藤原書店、2020年

評者：真野倫平（南山大学）

ジュール・ミシュレの著作では、『フランス史』抄訳が藤原書店、『フランス革命史』抄訳が中央公論社から刊行されたほか、現在『フランス史』全訳が論創社から刊行中である。さらに『世界史入門』『民衆』『愛』『女』『魔女』『人類の聖書』などのエッセーも翻訳され、すでに主要作品の大半が紹介されたといえる。そのミシュレの日記が大野一道氏の編訳によって藤原書店より刊行された。青年時代の日記についてはすでに『全体史の誕生 若き日の日記と書簡』（2014年、藤原書店）に収録されており、本書にはそれ以降の1830年から1874年に至る日記が含まれる。日記のフランス語原著は四巻にわたる浩瀚なもので、今回の抄訳も二分冊全体で1500ページに及ぶ。この分量を前に戻込みする読者もいるかもしれないが、詳細な注が付されているため予備知識がなくても困難なく読むことができる。

内容は驚くほど多彩である。一方でこの日記はミシュレの私生活の記録であり、家庭内の出来事や友人との交際が記されている。学者・文学者・芸術家など同時代の著名人との交流も興味深いものだ。他方でそれは日々の省察を書きとめた一種の思索ノートであり、そこにはミシュレの歴史思想が粗削りな形で残されている。またそれは、1848年革命、ルイ・ナポレオンのクーデタ、普仏戦争、パリ・コミュンなどの歴史的イベントに関する貴重な証言でもある。さらに、ミシュレが毎年のようにフランスの諸地方や外国を訪れた際の旅行記としての性格も備えている。

とはいえ、ミシュレの日記で最も興味深いのは、私生活と公的な仕事の複雑な絡み合い、両者の相互的な影響関係である。たとえば1839年の妻ポーリーヌの死のさい、ミシュレはそれまで歴史家の仕事に没頭するあまり妻を省みなかったことで激しく自分を責める。しかしやがて日記の中で彼女は「古きフランス」の象徴となり、亡き妻に対する追悼の念はいつしか過去をよみがえらせる歴史研究の原動力となってゆく。「妻が死に、わたしの心は引き裂かれた。しかしその裂け目から、ほとんど熱狂的とも言える激しい力が湧き出てきた。わたしは一種暗い喜びをもって、十五世紀フランスの死のなかに没入した」。また、『フランス革命史』執筆中の1846年にミシュレは父親を失うが、その死の床のかたわらで彼は大革命について思索を巡らせる。「わたしは父が息を引き取ったベッドのそばにいて、陰鬱な問題に思いを巡らせていた」。なぜなら亡き父は「十八世紀と大革命」の伝統であり、ミシュレは歴史家としてそれを継承する義務を負って

いるからだ。ここでは息子としての追悼と歴史家としての職務が交錯し、日記での省察がそのまま『フランス革命史』の序文に活かされることになる。

ミシュレの歴史作品と日記はこのように深部で通底している。彼にとって祖国フランスは拡大された家族であり、その歴史を書くことは自らを支援してくれた家族に対する報恩の行為なのである。ミシュレの歴史叙述の中心に常に歴史家の自我が浮かび上がるのはそのためだ。近年のフランス歴史学においては、ピエール・ノラの「自己史」やイヴァン・ジャブロンカの「フィクションとしての〈私〉」が示すように、歴史家の自我が重要な論点となっており、このような観点からもミシュレの歴史叙述のあり方は注目に値する。

本書の後半部（第二分冊）においては、ミシュレが五十歳で再婚した二十歳年下の妻アテナイスに関する記述が大きな部分を占める。この若き妻はミシュレの関心を「女性」や「自然」に向けさせた重要な存在であり、彼女なしには『愛』『女性』および博物誌四部作は存在しなかつただろう。妻に対する大仰な愛情表現は現代人の目にはあまりにロマン主義的なものに映るし、夫婦の性生活やアテナイスの健康——とりわけ排泄の話など——に関する露骨な記述は読者を戸惑わせるにちがいない。そこには同時代の自然主義文学に通じる医学的関心とともに、ある種の倒錯的なフェティシズムも感じられる。「彼女の身に属する下の方とされているものごとでのすべてが、わたしにとっていかに大切で神聖かつ詩的なものだったか」。

しかしこの身体に対する鋭敏な感性もまた、ミシュレの歴史の独創性をなすものだ。彼が『フランス史』において権力者の病める身体（ルイ十三世の排泄物、リシュリューの小便、ルイ十四世の痔など）に時代にのしかかる宿命的な力を見出したこと、あるいは『魔女』において魔女たちの辱められた身体が持つ反抗の力を見抜いたことを思い起こそう。そこには、人間の身体性に注目し、精神と身体の高次元性を転倒しようとする歴史家としての野心が認められる。それはアナール学派から『身体の歴史』（アラン・コルバン他）へと至る現代歴史学の問題意識を先取りするものであり、ここにもミシュレの歴史が時代を越えて読み継がれる理由の一端があるといえよう。

## 「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

**échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています**

- ◇ 内容について フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。
  - ◇ 分量 cahier 2 頁分（2000 字程度）を上限とする。
  - ◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。
    - ・ 特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。
    - ・ 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。
  - ◇ 締め切り 毎年 3 月・9 月末日
  - ◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：  
cahier\_sjllf@yahoo.co.jp
- \* 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。  
\* 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

## 書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応し兼ねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：  
[cahier\\_sjllf@yahoo.co.jp](mailto:cahier_sjllf@yahoo.co.jp)

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち **cahier** にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は **cahier** 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

## cahier 30

編集 研究情報委員会

発行日：2022年9月30日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25 日仏会館505

TEL: 03-3443-6671 FAX: 03-3443-6672